

平塚市教育委員会令和6年7月定例会会議録

開会の日時

令和6年7月30日（火）14時00分

会議の場所

平塚青少年会館2階集会室

会議に出席した者

教育長 吉野 雅裕	委員 守屋 宣成	委員 菅野 和恵
委員 大野 かおり	委員 増井 峰夫	

説明のため出席した者

◎教育総務部

教育総務部長	長谷川 孝	教育総務課長	野地 剛
教育総務課教育総務担当長	渋谷 悟朗	教育総務課企画担当長	松本 信哉
教育施設課長	金子 稔	学校給食課長	吉澤 達夫

◎学校教育部

学校教育部長	石井 鮮太	学務課長	高梨 里志
教職員課長	宮坂 正	教育指導課長	若杉 真由美
教育指導課学校安全担当課長	斗澤 正幸	教育研究所長	伊沢 秀樹
子ども教育相談センター所長	中山 文恵		

◎社会教育部

社会教育部長	石川 亜貴子	社会教育課長	石塚 誠一郎
中央公民館長	鳥居 昌	スポーツ課長	新倉 好人
中央図書館長	藤田 忠義	博物館長	浜野 達也
美術館長	戸塚 清		

会議の概要

【開会宣言】

○吉野教育長

これから教育委員会令和6年7月定例会を開会する。

本日は、傍聴を希望される方が10人を超えているが、平塚市教育委員会傍聴規則第2条第3項の規定に基づき10人を超える傍聴を認める。

【前回会議録の承認】

○吉野教育長

始めに、令和6年6月定例会の会議録の承認をお願いします。

(訂正等の意見なし)

○吉野教育長

訂正等の意見がないので、令和6年6月定例会の会議録は承認されたものとする。

1 令和7年度平塚市立中学校使用教科用図書の採択について

○吉野教育長

令和7年度に平塚市立中学校の生徒が使用する教科用図書について採択するものである。詳細は教育指導課長が説明する。

○教育指導課長

令和7年度平塚市立中学校において生徒が使用する教科用図書について、協議の上採択していただく。

令和7年度平塚市立中学校において使用する教科用図書については、平塚市教科用図書採択検討委員会設置要綱に基づき、採択検討委員会を設置し、採択に関する必要な事項を教育委員会に報告することを目的に調査・研究及び協議をしてきた。

まず、第1回平塚市教科用図書採択検討委員会では、「義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律」、「教科用図書採択の流れ」、「令和7年度義務教育諸学校使用教科用図書採択方針」などを確認した。

第1回平塚市教科用図書採択検討委員会の後、設置要綱に基づき、今回採択する中学校教科用図書10教科16種目について、調査員会を設置した。調査員会については、平塚市、秦野市、伊勢原市の調査員及び大磯町と二宮町の調査員、合計4名で調査活動を行った。

調査の観点については、神奈川県教科用図書選定審議会の観点を参考にした。

第2回平塚市教科用図書採択検討委員会では、平塚市の調査員が、調査報告を行い、その後、検討委員による質疑と協議を行った。その中で、本市の生徒の実態にあった教科書の在り方や、教師の指導に即した教科書の在り方について質問や意見・要望をいただくことができた。また、保護者代表の方にも出席いただき、協議へ参加いただいた。

本日の教育委員会においては、令和7年度中学校において使用する教科用図書を種目ごとに協議の上、採択していただく。

○吉野教育長

ただいまの説明について、質問はあるか。

○守屋委員

確認事項として、教育指導課長からこれまでの経過の概略を説明していただいたが、公正な採択の確保という点で、今日まで対応がなされてきたかどうか伺いたい。また、採択検討委員会において公正に審議が進められたと受け止めているが、事務局としては、どのように受け止めているか確認したい。

○教育指導課長

まず、公正な採択の確保に向けた対応についてだが、文部科学省や神奈川県教育委員会からの指導もあり、各学校に対して公正確保の通知を出し、学校において教科書発行者による献本や自宅訪問等の不正行為がないように、校長会においても十分注意するよう依頼してきた。その結果、学校等における不公正な動きは見られなかったと認識している。

次に、検討委員会の審議に対する受け止めについてだが、検討委員会においては、検討委員の皆様は役割や立場を十分に理解いただき、誓約書に署名をいただいている。検討委員会当日は、静ひつな環境確保ができたものと考えている。また、検討委員会の中では調査員の調査研究報告がなされた。報告は公正な内容であり、これに基づき協議を行うことができたので、会議は公正に進められたと認識している。

○吉野教育長

ほかに質問はあるか。

(質問等の意見なし)

○吉野教育長

特に質問がないようなので、令和7年度平塚市立中学校において使用する教科用図書について、各種目の採択に移る。

【国語】

○吉野教育長

国語科から始める。各委員の意見を伺う。

○菅野委員

私は、語彙力を身に付けるためどのような工夫がされているかに着目して、各発行者の教科書を見てみた。

例えば、教育出版には巻末に「理解に役立つ言葉」や「表現に役立つ言葉」がまとめられていたり、三省堂にも「語彙の広がり」という資料が巻末に示されていたりしている。東京書籍にも、「広がる言葉」が「てびき」のところに示されていたり、デジタルコンテンツの中に「言葉を広げよう」という資料が掲載されたりしている。

その中でも、私は光村図書出版の「語彙ブック」が面白いと思った。すぐに開いて使えるよう、他のページと大きさが違っていて、紙の材質も異なっている。

語彙力は、学習や日常生活を支える土台になるし、また自分の考えや思いを伝え、人間

関係を構築していく上でも大切なものだと思う。たくさんの言葉と出会い、自分の思考や感情を的確に表現するための教材として、これは大人になっても使えると思う。

○大野委員

私も菅野委員と同じで光村図書出版の「語彙ブック」が良いと思った。

採択検討委員会の協議の中で、自分の思いや考えを伝えるための語彙力には、生徒間で大きな差があり、語彙力の不足から、コミュニケーションがうまく取れない子どもたちもいるという話が出ていたかと思う。そして、語彙を広げていけるような資料が盛り込まれている教科書は非常にありがたいという話もあった。

光村図書出版の「語彙ブック」には、自分の気持ちや考えに合った表現が掲載されている。学習や生活の中で活用することにより、子どもたちが使う言葉が広がり、磨かれていくのではないかと感じる。また、小学校で学んだ「言葉の宝箱」につながる二次元コードも掲載されており、小学校の学びとのつながりが持てるという点でも、魅力的に感じた。

○吉野教育長

二人の委員から語彙を豊かにするという点で、光村図書出版の「語彙ブック」が良いという意見をいただいた。

他に意見はあるか。少し視点を変えて、例えば古典の扱いなどはどうか。

○増井委員

「竹取物語」はどの発行者でも1年生の教材として扱われているが、光村図書出版では最初に主な登場人物とその関係が図で示されている。また、最後には、「貴公子たちの失敗談」という見開き2ページに、かぐや姫への求婚に失敗した4人の貴公子たちの話が載っており、言葉遊びで締めくくられている。4枚の絵と解説入りで、古典に対する親近感を覚えた。

○守屋委員

「竹取物語」は発行者によって現代語訳の記載の仕方に、特徴があると思った。

東京書籍、三省堂、教育出版は、下の段に色付きの文字や色付きの枠囲いで示されているが、光村図書出版は、古文の横に記載されている。

古典にあまり馴染みのない1年生の段階では、上下に見比べるよりも隣に現代語が書かれている方が分かりやすく、親しみやすいのではないか。また、三省堂は「竹取物語」の挿絵が現代的なものになっているという点で、親しみやすさを感じるが、個人的には昔の絵の方が古典の世界に浸れるのではないかと思う。

○吉野教育長

2年生と3年生の古典の扱いについてだが、光村図書出版以外の発行者は古典の教材がまとめて掲載されている。光村図書出版は、2年生では「枕草子」、3年生では「論語」が最初の方に掲載されており、その後古典の教材が掲載されている。

このことについて、委員の考えはどうか。

○増井委員

古典をまとめて扱う良さもあるが、光村図書出版のように、学年の早い段階で一度古典に親しみ、その後古典の教材をまとめて学習することで、深く古典を学んでいけるのではないかと思う。

○吉野教育長

古典以外の視点でも良いので、意見はあるか。

○菅野委員

光村図書出版の「学びへの扉」は、学習の流れと、この学習を通して身に付ける資質・能力が、分かりやすくまとめられていると思った。

教材を学ぶのではなく、教材で何を学ぶのかが明確になっているので、子どもたちだけではなく、経験が浅い教員にとっても使いやすい教科書だと思う。

○守屋委員

学習の流れが見通せるという点でいえば、東京書籍には「てびき」、三省堂には「学びの道しるべ」、教育出版には「学びナビ」や「学習活動の流れ」というページが設定されていたが、見やすさ、分かりやすさという点では、光村図書出版の「学びへの扉」が一步リードしている印象を持った。

○大野委員

「学びへの扉」は、光村図書出版の大きな特徴の一つだと思う。

学習の流れの中で、目標とリンクしている活動には色がついている。生徒にとっても、先生方にとっても、どんな学習をして、どんなことができるようになれば良いのかということ意識しながら学習を進めることができると思った。また、「学びのカギ」では、教材を例に挙げながら学びのポイントがまとめられている。

この「学びのカギ」は、巻末にまとめて一覧にもなっているので、これまで身に付けた力を確認しながら他の学習や日常生活にいかすことができると思った。

○増井委員

先ほど菅野委員が言った、「経験が浅い教員にとっても使いやすい」という点は、子どもたちにとっても、学習の質を一定程度担保していくために大切なことだと思う。また、採択検討委員会で読書活動についても話題になっていたが、光村図書出版には、最初の読書単元で対話的な読書活動が複数紹介されている。もちろん、個人で楽しむ読書活動もあるが、その後に対話的な学習ができるのは更に良いことだと思う。

○吉野教育長

各委員の意見を伺うと、光村図書出版を推す声が多いようである。

私も、光村図書出版が良いと思う。光村図書出版は、学習指導要領の内容と題材との関

連が非常に明確であると感じる。大野委員の話にもあったが、生徒にとっても先生方にとっても、どんな学習をしてどんなことができるようになれば良いのかを意識しながら学習を進めることができると思う。そして、それが生徒の主体的な学びにつながっていくのではないかと思った。また、採択検討委員会で委員の方から「教科書の一番大事な部分は、やはり作品の持つ力である」というような話があった。

古典で力のある作品だが、以前国語の先生が「平家物語」の「扇の的」が欠かせないとおっしゃっていた。そういった点で、「扇の的」を扱っていたのは、東京書籍と光村図書出版である。一方、三省堂と教育出版は「敦盛の最期」を扱っている。これも良いのだが、「扇の的」には登場人物の葛藤があり、当時の武士の考え方や信条も詰まっていて、生徒が共感できるところが多く、優れた教材であると思う。

それから、魯迅の「故郷」。これは、各発行者の3年生の教科書に掲載されていた。また、井上ひさしの「握手」も素晴らしい作品である。こちらは三省堂と光村図書出版に掲載されていた。掲載されている教材を総合的にみても、光村図書出版はバランスよく優れた教材が掲載されているという印象である。

それでは、国語は光村図書出版を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「光村図書出版」が採択された。

【書写】

○吉野教育長

続いて、書写に移る。各委員の意見を伺う。

○菅野委員

私は、東京書籍か光村図書出版で迷っている。東京書籍は、「見つけよう」、「確かめよう」、「生かそう」という学習の進め方が分かりやすく、生徒は学習に取り組みやすいのではないかと思った。一方、光村図書出版は別冊の「書写ブック」が良いと思った。「年賀状を書こう」では、実物大のはがきを使用し、書き方を学ぶことができるようになっている。また、光村図書出版の教科書には、漫画を読み、手書きの良さについてみんなで話し合えるページが掲載されている。文字を書く機会が少なくなった現代だからこそ、改めて手書きの良さについて考えることのできるページには魅力を感じた。

○守屋委員

文字を書く際には、正しく整えて書くことが大切である。正しく整えて書くためには、正しい姿勢で書くこと、基本の点画をしっかり理解して書くことが重要だと考えている。そういった意味では、東京書籍、三省堂、教育出版、光村図書出版の4者とも、丁寧にとめられていると感じている。また、私は書写の学習で身に付けた力を、日常生活にいかしていくことが大切だと考えているが、「職場訪問をしよう」、「地域の活動に参加しよう」「防災訓練」など、学校生活に限らず、身近で具体的な場面が取り上げられている東京書籍

は、今後の生活にいかせるという点で良いと思う。

○増井委員

日常生活にいかすという点で言うと、東京書籍の「筆記具の使い分け」は、紹介されている筆記具も多く、どんな場面で活用できるかが明確に示されている。生徒が今後様々な場面でどの筆記具を使ったら効果的に伝えることができるかを考える際に、役立つのではないかと。また、私も光村図書出版の「書写ブック」が気に入っている。毛筆で確かめたことを意識しながら、豊富に掲載された硬筆課題に取り組むことで、他の文字にもいかすことができるようになるのではないかと思います。

以上のことから、東京書籍か光村図書出版のどちらかが良いのではないかと考えている。

○大野委員

私は、東京書籍が良いと思った。中学校で初めて行書を学習するが、文字を正しく整えて速く書くためには、行書を如何に書けるようにするかがポイントとなる。東京書籍では、「東」という漢字を楷書と行書を横並びにして示し、各々の特徴を明確に示している。特に、行書の4つの「動き」に着目し、楷書と行書の両方の文字をなぞることで、動きの違いについて体感できるようになっている。このように実感を伴った学びは、生徒にとって非常に有効であると感じる。

行書の扱いの分かりやすさを考えると、私は東京書籍が良いと思う。

○菅野委員

先ほどの大野委員の行書の説明を聞き、実感を伴って学べるという点で、私も東京書籍が良いと思った。

○吉野教育長

私も、東京書籍が良いと思った。先ほど守屋委員が発言された「職場訪問をしよう」の内容は、職場体験学習で活用できる。お礼状や聞き取りメモなどが掲載されていて、大変分かりやすいと思った。職場体験先にお礼の手紙を書いて出す際には、細心の注意を払う必要がある。そういった意味で、「職場訪問をしよう」は、平塚市の生徒にとって、まさに日常の学習や生活にいかすことのできるものとなっている。

以上のことから、私は東京書籍が良いと思った。

増井委員は東京書籍と光村図書出版のどちらかが良いと言っていたがどうか。

○増井委員

私も皆さんの意見を伺い、東京書籍が良いと思った。

○吉野教育長

それでは、書写は東京書籍を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「東京書籍」が採択された。

【地理】

○吉野教育長

続いて、社会科・地理的分野に移る。各委員の意見を伺う。

○大野委員

私は帝国書院が良いと思った。単元全体を通した学習課題に注目すると、東京書籍では「探究課題」、教育出版では「章を見通した学習課題」、帝国書院と日本文教出版では「章の問い」や「節の問い」として、それぞれ単元の導入場面で単元全体を通した学習課題が示されている。ただ、帝国書院は他者とは違い、単元を通した学習課題を始めのページだけではなく毎時間の学習課題とともに示している。

常に単元全体の課題を意識しながら学習に取り組めるという点で、私は帝国書院が良いと思った。

○菅野委員

私も帝国書院に好感を持った。採択検討委員会の中で、新しい用語が出てきた時に、同じページに用語の説明があると指導しやすいという話があった。各者用語の説明はあるが、帝国書院は、「解説」として同一ページに記載があった。また、地理の学習では地図帳を積極的に活用していくことが大切だと思う。各者それぞれ地図帳の活用を促すような資料が掲載されているが、帝国書院では、「地図帳活用アイコン」という記号で、視覚的にも分かりやすく示されている。また、地図帳の活用場面が数多く設定されているという点でも、帝国書院が良いと感じた。

○増井委員

私も帝国書院が良いと思った。地図帳との連携の話があったが、他教科や他分野との連携も、地理の学習においては重要なポイントになってくると思う。

東京書籍と日本文教出版でも他教科との関連を示す記載はあるが、特に教育出版と帝国書院の2者はとても分かりやすく、ページの下部に関連項目が多く示されている。さらに、帝国書院は、地図や写真などの資料にも、他分野に関連するものについては、アイコンで視覚的にも分かりやすく示されている。また、小学校との関連についても、多数示されていてとても良いと思った。

○守屋委員

私は、帝国書院のイラスト地図に魅力を感じた。「日本の諸地域」の学習で、東京書籍、教育出版、日本文教出版の3者は、写真から学習が始まっているが、帝国書院は他者と異なり、それぞれの地域を概観するイラスト地図が始めに掲載されている。

親しみやすいイラストで大まかな地域の様子を捉えた後に、具体的な写真が示されてい

ることで、生徒たちが地域の特色を着実に理解できるように工夫されていると感じた。その点で、私は帝国書院が良いと思った。

○吉野教育長

私も皆さんと同じく、帝国書院が良いと感じた。私は巻頭にまとめられている思考ツールを紹介しているページに魅力を感じた。

マトリックスやベン図、ウェビングなど、目的や用途によって様々な思考ツールを使って学習を進められるように、詳しく解説されている。また、思考ツールが活用できる場面にはアイコンが示されている。

思考ツールを効果的に活用して、学びを深められるよう工夫されているという点からも、帝国書院が良いと感じた。

皆さん帝国書院という意見なので、社会科・地理的分野については、帝国書院を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「帝国書院」が採択された。

【地図】

○吉野教育長

続いて、地図に移る。各委員の意見を伺う。

○守屋委員

私は帝国書院が良いと思う。帝国書院は、全ての州に大きなイラストの鳥瞰図が掲載されている。各州の特色を大観し、概略をつかむことができると感じた。

東京書籍にも鳥瞰図はあるが、帝国書院の方がより大きく紙面を使って掲載されている。また、東京書籍には南アメリカやオセアニアについての鳥瞰図はない。

帝国書院の大きな鳥瞰図をきっかけに、生徒たちは興味・関心をもって世界のそれぞれの州の学習に取り組めると感じた。

○吉野教育長

私は帝国書院の歴史の鳥瞰図にとっても魅力を感じた。例えば、遣唐使の寄港地が確認できるなど、鳥瞰図の上に分かりやすいイラストが掲載されていたり、昔の主な出来事が年表で示されていたりするなど様々な工夫がされていて、歴史的分野の学習でも有効に活用できると思う。

以上のことから、私も帝国書院が良いと思う。

○増井委員

私も帝国書院が良いと思う。地図帳は、他教科や他分野でも積極的に活用できると良いと思う。帝国書院では、例えば修学旅行などでも活用できるように、京都市や奈良市の市

内地図などが掲載されているのが良い点だと思う。東京書籍でも同様のページが設けられているが、帝国書院の方がより広範囲に詳しい情報が載っているため、帝国書院が良いと思った。

○菅野委員

私は、地図帳に示されている問いのコーナーがとても良いと思った。どちらの発行者も、様々な問いが、多数設定されている。東京書籍は、かわいいキャラクターとともに視覚的に分かりやすく問いが示されていて良いと思った。一方、帝国書院は全ての問いにチェックボックスと通し番号が付いており、生徒が達成感をもって学習に取り組めるという点で、私は帝国書院が良いと思う。

○大野委員

私も、皆さんと同じく、帝国書院が良いと思った。地図の使い方について、東京書籍も帝国書院も、それぞれ巻頭に解説ページが設けられているが、帝国書院では小学校で学習した内容を振り返るコーナーもある。小学校との接続が意識されているという点でも、帝国書院の方が良いと感じた。

○吉野教育長

皆さん帝国書院が良いという意見のため、地図は帝国書院を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「帝国書院」が採択された。

【歴史】

○吉野教育長

続いて、社会科・歴史分野に移る。各委員の意見を伺う。

○大野委員

私は、東京書籍の各章最後にあるまとめの学習が生徒にとって分かりやすいように思った。「フィッシュボーン図」や「くま手チャート」などの思考ツールを使いながら、各章の問いと各節の問いに対する自分の考えをまとめられる構成となっており、章の中で生徒に示した問いを大切に扱いながら、学習を振り返ることができると思う。帝国書院や日本文教出版も、東京書籍と同様に思考ツールが紹介されており、多面的に時代の特色を捉えて表現することができると思った。ただ、東京書籍は、まとめページで思考ツールが大きく表示され、紹介されている種類も多いことから、生徒にとって使いやすく、考え方の幅が広がるのではないかと考えた。

○菅野委員

私は、帝国書院は、「歴史を探ろう」のコーナーで沖縄戦のことが見開き2ページを使い、

詳しく書かれている点が良いと思った。各者とも沖縄戦についての記載はあるが、公民的分野の学習につなげ、現在の基地問題などを考える上でも、沖縄戦のことを詳しく取り上げることは大切なことではないかと思っている。また、日本文教出版は「地域調べ」のコーナーとして多摩地域の空襲について調べる学習活動例が載っている点も良いと思う。平塚も大規模な空襲の被害を受けた土地なので、空襲について戦争と平塚を関連付けながら学習できると思った。こうしたことから帝国書院と日本文教出版のどちらも良いと考えている。

○守屋委員

平塚市に関することとして、平塚市が姉妹都市提携を結んだリトアニアのカウナス市には杉原千畝記念館があるので、平塚市の子どもたちには杉原千畝について知ってほしいと思う。杉原千畝については、東京書籍、教育出版、帝国書院、日本文教出版、自由社、育鵬社、令和書籍に紹介されていたが、中でも東京書籍と帝国書院は当時の日本とドイツの関係と、それを踏まえた杉原千畝の業績が端的にまとまっているように思った。

○増井委員

私は帝国書院が良いと思った。理由は、日本と世界とのつながりが非常に捉えやすいと思ったからである。東京書籍、教育出版、山川出版社、日本文教出版にも世界と日本とのつながりを視覚的に捉えることのできるページがあるが、帝国書院の「世界とのつながりを考えよう」では遣唐使が苦労してたどり着いた中国の都の様子が見開き2ページのイラストで描いてあり、世界と日本の関わりをより意識できると思った。また、授業ではこのページでグループの話合いなどもできると思う。

○菅野委員

対話的な学びは、学習指導要領でも言われているように、今の時代に大切な学び方だと思う。話合い活動をすることで、歴史的な考え方を使いながら自分の考えを固め、深い学びを実現していけるからである。ただ、話合い活動をする上で、子どもたちにどのような資料を基に、どのような課題を設定するのかといった点は、とても難しいことだと聞いている。帝国書院には、「アクティブ歴史」という特設ページがあり、具体的に設定されたテーマでの話合い活動に取り組みやすいのではないかなと思う。こうしたことから考えてみると帝国書院が良いのではないかなと思う。

○吉野教育長

私も、帝国書院が良いと思う。やはり「タイムトラベル」のページを見比べることで時代の変遷を通じて、生徒自身がその時代に入り込んだような気持ちになりながら、学習に取り組めるのではないかなと思う。例えば、平安時代と鎌倉時代を見比べることで、時代ごとの変化や共通点を理解して、時代の特色を大まかに理解しやすいと思う。ただ、時代の特徴を際立たせるために少々情報を盛り込み過ぎているようにも思えたが、これはイラストという資料の性質上の特徴として許容できる範囲ではないかと思った。また、中学1年生にとっては、小学校の社会科と似た感覚で親しみやすさを感じると思った。

○守屋委員

小学校との接続という学びの連続性でいえば、帝国書院は1時間ごとの学習をするページに、他教科や地理、公民との関連の用語が記載されているほか、小学校で学習した用語についても記載されている。教科書の冒頭や各章の始めに記載するのも学習の見通しを持ちやすい工夫だと思うが、実際の授業でよく開くページにこうした記載があることで、目にする機会が増え、小学校での学習を思い出しながら学習することができるのではないかなと思った。

始めは、東京書籍と帝国書院で迷っていたが、帝国書院の方が良いと思った。

○大野委員

義務教育では7年間に渡り社会科を学ぶが、小学校の社会科及び中学校の地理、歴史、公民を関連付けながら、社会科の学習を滑らかに接続していくことは大切なことだと思う。東京書籍、教育出版、帝国書院の巻末には、これまでの歴史の学習を踏まえ、今後の社会の在り方について考えるページがある。公民の学習で現代社会の諸課題の解決に向けて考えていく上でとても必要なことだと思う。中でも帝国書院は、この巻末のページに向けて、第2章以降の各章のまとめに「現在とのつながりを考えよう」という項目があり、歴史の学習全体をとおして現在とのつながりを考えられるようになっている点が特徴的であり、優れた工夫だと思う。社会科の目標である公民的資質の育成といった視点から考えて、私も帝国書院が良いと思い直した。

○吉野教育長

委員の意見としては帝国書院を推す声が多いようなので、社会科・歴史的分野については、帝国書院を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「帝国書院」が採択された。

【公民】

○吉野教育長

続いて、社会科・公民的分野に移る。各委員の意見を伺う。

○増井委員

社会科は、暗記する教科というイメージがあったが、各者直面している今日的課題について、生徒が自分事として考え、議論し、学びを深めることのできる作りになっていると感じた。

特に、教育出版のコラム「公民の窓」は、生徒が学習した内容と関連した話題を読みやすくまとめられているところに魅力を感じた。学習した内容の興味や関心を更に高めることで、公民をより身近に感じ、実際の生活を想像することにつながるのではないかな。

自由社は「ミニ知識」として関連するコラムが掲載されていたり、「もっと知りたい」として発展的な内容が掲載されていたりする。日本文教出版も「情報スキルアップ」で新聞やインターネットに関わる題材を通して、生徒が生活との関連を想像できるよう工夫されていたが、公民をより身近に感じられるという点で教育出版が良いと思う。

○大野委員

私も教育出版が良いと思う。私は、対立と合意、効率と公正について扱われているページを各者比較してみた。どの発行者も生徒にとって身近で考えやすい事例が取り上げられ、考えられるようになっている。特に、じゃんけんの公平性についての議論は、育鵬社では本文に記載があるが、教育出版は、コラム「公民の窓」に記載され、より身近な事例を基に、生徒が議論できるようになっていると思う。

○菅野委員

私も教育出版が良いと思う。教育出版は学習したことの振り返りや、活動が丁寧に扱われ、充実していると感じた。章の学習を見通す導入ページ「ウォーミングアップ！公民」には、課題を捉え、共有するための様々な問いが設定されている。また、章末にある「学習のまとめと表現」では、様々な思考ツールが活用されていて、生徒が学習したことを自分で整理しやすいような工夫が見られる。

○守屋委員

私はSDGsの視点も意識してもらいたいと考える。各者、巻頭や巻末にSDGsが扱われているが、帝国書院では、持続可能な社会をつくるための具体的な取組が、「未来に向けて」というコラムとして紹介され、各章末にもSDGsの17の目標と、その実現に向けた取組が複数掲載されており、持続可能な社会に向けた行動を促す工夫が感じられた。

教育出版もSDGsを一つの軸として学習していく構成となっており、本文のある全てのページの脚注部にSDGsとの関連が書かれていることも生徒にとってプラスではないかと考える。

○吉野教育長

私も教育出版が良いと思う。公民は生徒が多面的・多角的に考え、表現することが学習を深めるためには必要ではないかと考える。教育出版は、本文の全てのページの脚注部に守屋委員が言っていたSDGsの記載だけでなく、小学校、他分野、他教科との関連が書かれており、様々な視点で学習内容と向き合えるところが良いと感じた。

公民については教育出版を推す声が多いようだが、いかがか。

○守屋委員

皆さんの意見を伺って、私も教育出版が良いと思う。

○吉野教育長

それでは、社会科・公民的分野は、教育出版を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「教育出版」が採択された。

【数学】

○吉野教育長

続いて、数学に移る。各委員の意見を伺う。

○大野委員

私は啓林館が良いと思う。各者、巻頭に数学の学び方として問題解決の過程が示されているが、啓林館は解決の流れがステップ1からステップ3までとなっており、非常に明確で学習者にとって分かりやすく示されていると思った。また、1年生の方程式の学習では導入で、1日乗り放題のチケットを買った方がいいか、それとも1回ずつバスと電車の料金を払った方がいいかどうかという問いになっている。校外学習の計画を立てる場面であり、子どもたちにとって身近な題材で、ワクワク感をもって取り組んだり、方程式を使って問題を解く良さが感じられたりすると思った。大日本図書では試合の進行計画を立てる場面、数研出版ではレシートの消えた文字を推測する場面と、各者生活に即した身近な題材で工夫されていると思うが、校外学習の計画を立てる場面は、学校生活でどの子どもたちも経験していることだと思う。

一番身近で興味をもって取り組めるという意味では啓林館が良いと思った。

○守屋委員

私も巻頭にある資料が各者充実していると感じた。数学の学び方や、数学的な見方・考え方が示され、数学の学習に入る前や学習の途中に気を付けたいことや大切にしたいことを確認したりすることができると思った。その中で、私が特に気になったのは、ノートの使い方のページである。ノートの使い方は各者巻頭に示されているが、その中でも啓林館のノートの工夫のページが分かりやすいと思った。啓林館では、見開き2ページを使い、「ノートへ書くときに気をつけること」と「大切だと思ったことや自分の意見など」を色分けして、詳しく記載している。学びのプロセスを大切にしたいノートの作りになっているので、数学が苦手な子どもにとっても参考になると思った。

○菅野委員

私も啓林館が良いと思った。採択検討委員会の協議の中で、検討委員が「数学の授業ではいかにシンプルに分かりやすく教えることができるかを大切にしている」と話をしていたのがとても印象に残っている。大野委員の意見である、巻頭の数学の学び方は、まさに問題解決の過程がシンプルで分かりやすく示されていると思う。また、巻末には「学びをふりかえろう」「力をつけよう」という領域ごとの問題があり、生徒の学習状況に応じて問題を選択し、復習できるようになっている。さらに、「学びをいかそう」では、学んだ数学を身の回りなどで活用するための問題が掲載されている。そこもシンプルで扱いやすいと

思った。

○増井委員

私も啓林館という意見に賛同する。今話に出た、巻末にある補充問題「力をつけよう」には「入試問題にチャレンジ」という問いが設けられていることが採択検討委員会でも話題になった。基礎的な問題にはマークが付いているので、数学が苦手な子も自分で問題を選択できるし、得意な子は入試問題にもチャレンジできるということで、子どもたちが主体的に数学を学べる良さがあると思った。

○吉野教育長

ここまでは啓林館を推す意見が多いようである。

小学校算数と中学校数学の違いの1つは、負の数の扱いである。負の数から学習を始めることは、生徒が中学生になったことを実感し、意欲的に取り組むことにつながるのではないかと考える。そういった意味では、1年生の学習は「正の数・負の数」からスタートした方が良いと思う。学校図書、啓林館、数研出版、日本文教出版はそのような単元構成となっている。

平塚の子どもたちには、数学の楽しさや面白さを感じてもらい、数学を好きになってもらいたいと思っている。数学の学習をワクワク感をもってスタートすることができ、各単元の導入において、どの子どもにも理解しやすく思考が広がる題材を設定しているのは啓林館だと思う。

それでは、数学については、啓林館を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「啓林館」が採択された。

【理科】

○吉野教育長

続いて、理科に移る。各委員の意見を伺う。

○守屋委員

私は、東京書籍と啓林館で悩んでいる。理科は一人で学習していくイメージがあったが、誰かと考えを共有したりディスカッションしたりすることはとても良い学びになるのではないかと。そういった視点で、教科書を見てみると、東京書籍は、巻頭に「議論のしかた」や「発表のしかた」が示されている。また、「じっくり探究」というページでは、探究の過程で行われる話合いの場面がイラストで示されており、学習のイメージが持ちやすくなっているなど、言語活動が充実するための工夫がされていると思う。

啓林館は、探Q実験前の「考えてみよう」や、探Q実験後の「発表してみよう」で、話し合ったり発表したりすることを通じて、生徒の思考を広げたり、深めたりする工夫がされている。どちらも甲乙つけがたい。

○増井委員

理科において観察や実験を安全に行うことはとても重要だと思っているので、そういった視点で各者見てみた。東京書籍、大日本図書、教育出版は、巻頭で安全に実験を行うための注意事項が掲載されている。学校図書は巻末に、啓林館は実験を行うことが多い化学分野の前に資料が掲載されている。私は、安全に配慮しながら学習を進めていくためにも、資料が教科書の冒頭に掲載され、学年の始めに安全について確認できるのが良いと思う。これは、生徒だけでなく、指導する教員にとっても大切なことだと思う。そういった意味で、東京書籍は、「理科室のきまり」が学年の始めに設定され、かつ目を引く紙面構成になっており、安全への配慮がなされているという印象を持った。

○吉野教育長

実験中の事故がテレビなどで報道されることもあるが、私も実験での安全確保は重要だと感じている。年度始めに確認することも大切だが、実験を行う際にその都度、実験を正しく安全に進めるためのきまりについて、確認しておくことも重要なことだと考える。そういった意味で、啓林館は実験を行うことが多い化学分野の前に資料が掲載されているので、安全に配慮されているという印象を受けた。

○大野委員

私も、実験の直前に理科室の使い方や安全面の配慮のページがあった方が良いと思う。また、生活に関わるという点では、各者資料やコラムが掲載されているが、特に啓林館の「部活ラボ」は面白いと思った。例えば、レイアップシュートのコツが取り上げられており、こんなところにも理科があるのかと驚いた。先生方が、このような日常の一コマをうまく授業に活用いただけると、とても楽しい学びになるだろうと感じた。

○菅野委員

私は、東京書籍と啓林館で迷っている。大野委員が言ったように、生活に関わるという視点で、啓林館には「部活ラボ」や「お料理ラボ」といったコラムがあり、生徒の興味や関心を引き出しやすいと思う。また、巻末には実験のプロセスを踏んでまとめられる「探Qシート」が付属されており、生徒の学習の支えになると思った。東京書籍は、巻頭に中学生でも分かるような本が紹介されている「科学の本だな」がある。理科に興味のあるお子さんにとっては魅力的であるし、学習に関する本がまとめられているので、楽しみながら読み進められると思った。

○吉野教育長

各者それぞれの特徴があり、教科書を見つめる視点によって考えは異なると思うが、私は啓林館が良いと感じた。まず、皆さんが言われているように「部活ラボ」などの、〇〇ラボは、生徒の日常が学習の延長線上にあることが感じられ、とても分かりやすく、面白いと思う。また、学年ごとにICTの活用に関する説明が見開きでまとまっているのは、啓林館の特徴であり、学習において有効に活用できると思う。

さらに、全学年で学習の並びが、生命・地球・物質・エネルギーの順で構成されており、3年間を通して系統的に学べる。学年間のつながりを感じやすいので、生徒は学びやすいと思った。

○増井委員

確かに、安全について都度確認することは大事だと思う。実験のたびに確認することを考えると、そのたびに教科書の巻頭に戻るより、同じ単元の前に掲載されていた方が、良いと思う。

私も、皆さんの意見を伺い、啓林館が良いと思った。

○吉野教育長

啓林館の良さを感じている人が多いようだが、啓林館でいかがか。

○守屋委員

皆さんの意見を伺い、総合的に考えると啓林館が良いと思った。

○菅野委員

私も啓林館が良いと思う。

○吉野教育長

それでは、理科については、啓林館を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「啓林館」が採択された。

【音楽一般】

○吉野教育長

続いて、音楽一般に移る。各委員の意見を伺う。

○増井委員

小学校高学年から中学生にかけて、多くの子は体が大きく成長し、変声期を迎える。このような時期に教科書で変声期について触れて、声の出し方について示していることはとても大切なことだと思う。

教育出版には「変声と混声合唱」というページがある。変声について解説するとともに、混声合唱のパートについて図で示していて分かりやすいと思った。

教育芸術社には、「自分の歌声を見つけよう」というページがある。声の出る仕組みについて説明があることに驚いた。このような説明を踏まえた上で、変声期に触れていて、とても説得力がある。そして「変声期に心がけること」として3つのポイントが示されていて、非常に分かりやすいと思った。

2者それぞれの良さはあるが、中学生という時期にきちんと変声期について触れて、この時期は特別な時期で、声が出にくいことがあるのだと全員で共通理解することは、生徒達にとっても良いことだと思う。歌うことに苦手意識を持たせないための一つ手立てになると思うので、より丁寧に説明している教育芸術社が良いと思う。

○大野委員

私も教育芸術社が良いと思った。先ほど増井委員が言ったように、変声期に触れることは大切なことだと思う。発達には個人差があり、早い段階で変声期を迎えた子が悩んでしまうことがないように、できるだけ早い時期に変声期について知ってほしいと思う。2者を比べると、教育芸術社の方がかなり早い段階で変声期に触れていて良いと思った。また、私は著作権について2者を比較してみた。教育出版は「著作物であるもの」と「著作物でないもの」をそれぞれ例示している。また、「Q&A」形式を採用し、具体的な例を紹介している。

教育芸術社は「著作権とは」「音楽を利用するときに気を付けること」「音楽が生み出される仕組み」の3点についてイラストを交えながら解説をしている。二次元コードが示されていて、もっと詳しく知りたい生徒は自分でアクセスをして調べることができる。

どちらも良さはあるが、中学生にとっては、やはりイラストがたくさんあった方が分かりやすいと思う。また、著作権についても早い段階からきちんと知ることは大切だと思うので、1年生から扱っている教育芸術社が良いと思う。

○菅野委員

私も教育芸術社が良いと思った。各者、巻頭に音楽家からのメッセージが掲載されている。教育芸術社は、新進気鋭の方が掲載されており、中学生にとって年齢が近く、親近感がわくのではないかと考えた。また、全学年において「学びのコンパス」というページが設けられているのも良いと思った。それぞれの教材において、どこをポイントにすれば良いのかがとても分かりやすい。これは生徒にとっても取り組みやすいと思うが、経験の浅い先生方にとっても授業を構成しやすいのではないかと感じた。教育出版にも同じようなページはあるが、比較すると教育芸術社の方が取り組みやすいように感じた。

○守屋委員

教育芸術社は、音楽を指導するときに押さえてたい大切な視点となる「音楽を形づくっている要素」が、各教材に示されている。また、巻末に掲載されている歌唱教材が、生徒にとって馴染みのある曲が多いという印象を受けた。平塚市にゆかりのある音楽ユニットの代表曲「COSMOS」も掲載されている。

○吉野教育長

教育出版は、「歌うための準備」というところにチェック欄がある。これをチェックしながらやっ払いこうというところから始まっており、丁寧に分かりやすく良いと思った。また、「故郷」が全ての教科書に掲載されているが、1年では同声二部合唱、2・3年上では混声三部合唱、2・3年下では混声四部合唱となっている。それぞれの時期の歌声で「故

郷」を合唱できるというのは良いことだと思う。

ただ、増井委員が言った変声期についての取扱いについては、私も配慮が必要なことだと感じる。扱い方については、やはり教育芸術社の方が非常に分かりやすく、説得力があると感じた。また、教育芸術社はポピュラー音楽についてのページが6ページにわたって掲載されており、とても興味深いと感じた。教育出版にも「ポピュラー音楽図鑑」というページがあるが、教育芸術社は情報量が多く分かりやすいと感じた。中学生にとっても興味を持てる内容なのではないかと思う。

皆さん教育芸術社という意見なので、音楽一般については、教育芸術社を採択してよいのか。

【結果】

全員異議なく「教育芸術社」が採択された。

【器楽合奏】

○吉野教育長

続いて、器楽合奏に移る。各委員の意見を伺う。

○大野委員

私は教育芸術社が良いと思った。教育芸術社には「音を合わせるときのコツ」というコラムが掲載されている。音楽の楽しさの一つは、友達と一緒に演奏することだと思う。生徒が合奏の楽しさを感じられるためのヒントとなるようなコラムが設けられているのは、とても良いと感じた。また、教育芸術社には様々な打楽器の演奏の仕方が写真とともに紹介されている。カスタネットやタンブリンなど、生徒にとって小学生のときに触れたことがある楽器だけでなく、あまり馴染みのない楽器が紹介されているので、生徒も興味を持ち、演奏してみたいと思えるのではないかな。

○増井委員

私も教育芸術社が良いと思った。掲載の仕方として、教育出版は吹く楽器と弾く楽器、打楽器といった分類をしている。それに対して教育芸術社は西洋の楽器、和楽器という分類をしている。実際は「吹く」、「弾く」、「打つ」といった活動で分けられると思うが、箏や三味線、太鼓などが、日本の楽器であるということを生徒にしっかりと捉えてほしいと思う。また、教育芸術社には「和楽器こぼればなし」というコラムがある。箏と琴、三味線と三線の違いが紹介されていて、非常に興味深いと感じた。

○菅野委員

私はアーティキュレーションが扱われているページで2者を比較してみた。

教育出版は「大きな古時計」を扱っていて、教育芸術社は「聖者の行進」を扱っている。どちらも馴染みのある曲を採用していて、生徒も取り組みやすいだろうと感じた。ただ、教育芸術社の方は、「聖者の行進」についてアルトリコーダーの楽譜とソプラノリコーダー

の楽譜を掲載している。この教材では、アーティキュレーションだけではなく、ソプラノリコーダーとアルトリコーダーの音色の違いを比べたり、リコーダーの種類によってふさわしい演奏方法を考えたりするなど、様々な学習の展開ができそうで良いと思った。

○守屋委員

教育出版の「吹く楽器の仲間たち」「弾く楽器の仲間たち」というページで世界各国の楽器を紹介しているページはとても面白く、生徒も関心を持てると思った。

ただ、総合的に見ると、それぞれの楽器のページにおける説明が丁寧で分かりやすい教育芸術社の方が良いと思った。また、資料として「バンドの世界をのぞいてみよう」「伝統の枠を超えて活躍する和楽器」など、生徒の多様な興味を引き出すような内容が豊富に掲載されているのが良いと思った。音楽には、クラシックだけではなく、様々なジャンルがある。生徒にとって、様々なジャンルが紹介されている方が音楽の楽しさを感じられるし、自分の好きな音楽のジャンルを見つけられるのではないかな。

○吉野教育長

私も教育芸術社が良いと思った。守屋委員が言うように、音楽はクラシックだけではなく様々なジャンルがある。子どもたちには、音楽に親しみ、音楽を楽しめる大人になって欲しいと願っている。そのため、中学生という多感な時期に是非様々な音楽に触れてもらいたい。また、リコーダーやギターについては、様々な種類を写真入りで紹介しているのが良いと思う。例えばギターについてだが、教育出版は、クラシックギターを弾くときの基礎である、アポヤンド奏法、アル・アイレ奏法が写真で丁寧に示されていて分かりやすいが、紹介されているのはクラシックギターのみで、他のギターは扱っていない。それに対して教育芸術社は、クラシックギターに加えて、フォークギターとエレキギターも紹介されている。また、二重奏や協奏曲の他に、弾き語りやロックバンドなど、様々な演奏も紹介されていて、幅広いジャンルでギターが用いられていることが分かる。

それでは、皆さん教育芸術社という意見なので、器楽は教育芸術社を採択するという事でよいかな。

【結果】

全員異議なく「教育芸術社」が採択された。

【美術】

○吉野教育長

続いて、美術に移る。各委員の意見を伺う。

○菅野委員

私は光村図書出版と日本文教出版で迷っている。

日本文教出版は表紙が素敵だと思った。1年はジョルジュ・スーラの「グランド・ジャット島の日曜日の午後」、2・3年上は葛飾北斎の「凱風快晴」、2・3年下は「大地の芸

術祭」である。西洋画、日本画、そして現代アートと様々なジャンルが採用されていて、美術の世界の広がりを感じた。また、光村図書出版と日本文教出版には「アール・ブリュット」が紹介されている。「アール・ブリュット」とは、美術の専門教育を受けていない人々が、独自の方法や発想で制作した芸術作品のことである。「アール・ブリュット」は、様々な人々の可能性や多様性を示せる芸術なので、生徒には是非触れてほしいと思っている。

○守屋委員

私は光村図書出版が良いと思う。光村図書出版には、「美術館を楽しもう」というページがあった。今の時代、簡単に調べることもできるが、やはり本物を見に行くことは大切だと思う。平塚市には美術館があるので、教科書の中に美術館に行くことを促すページがあるのはとても良いことだと思う。そして、隣に「芸術祭に行こう」というページがあるのもよく考えられていると思った。中学校で学んだことの先が提示されていて良いと思う。また、各者仏像について扱っているが、特に光村図書出版では、「手の形の意味」や「持ち物の意味」などの説明が専門的で面白いと思った。修学旅行などで現物を見る機会があると思うので、学んだことを活用できると思う。

○増井委員

私も光村図書出版が良いと思った。特に印象に残ったのは、「風神・雷神像」の写真である。京都の三十三間堂にある「風神・雷神像」は非常に有名だが、実物を見る機会はなかなかないと思う。掲載されている写真はとても迫力がある。写真が掲載されているページに関連して「風神・雷神図屏風」が3作も掲載されており、これも素晴らしいと思った。この3作品については、俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一とそれぞれ作者は異なる。このように同じ題材でも、異なる作者がそれぞれの切り口で描いている作品を比較することで、より深く鑑賞できると思った。

「風神・雷神図屏風」は開隆堂出版、日本文教出版にも掲載されている。掲載の仕方については、3者それぞれ工夫されているが、比較すると、やはり光村図書出版のものが一番良いと思った。

○大野委員

私も光村図書出版が良いと思った。光村図書出版の別冊「資料 つくってみよう見てみよう」がとても良いと思った。「どうやって描く？」では、花の絵がページの中心にあり、鉛筆や水彩絵の具、アクリル絵の具など、様々な画材での表現方法を紹介している。そして、次のページからそれぞれの画材を使った詳しい表現方法やポイントが示されている。この資料を見れば「自分のイメージを作品にするためには、この画材を使いたい」という思いをもって制作に取り組むことができると思う。日本文教出版にも、同じ内容のページがあるが、光村図書出版の方が扱っている画材の数が多く、生徒の思いをより具体化しやすいのではないかなと思う。大人になっても持ち続け、活用してほしいと思う素晴らしい資料である。また、「日本の絵画を楽しむ5つのキーワード」というページも特徴的である。風合いのある用紙に印刷されているため、実物に近い感覚で鑑賞することができ、日本美術の良さを味わうことができるのではないかな。

○吉野教育長

私も光村図書出版が良いと思った。中学生が試行錯誤しながら制作する様子が「みんなの工夫」というページで詳しく紹介されている。開隆堂出版は「発想・構想のヒント」としてデザイナーの制作現場を紹介している。日本文教出版は「発想・構想の手立て」というページを設けて発想や構想をより豊かに進めるための手立てを紹介している。それぞれ工夫はあるが、生徒と同じ中学生がどのような思いをもって制作しているのか、具体的な例を紹介しているのは光村図書出版だと思った。また、光村図書出版にはリトアニアの生徒作品が掲載されている。平塚市は、リトアニアと交流があるので、生徒にとっても身近に感じられるのではないかな。

○菅野委員

私は光村図書出版と日本文教出版で迷っていたが、皆さんの意見を伺い、光村図書出版が良いと思った。

○吉野教育長

それでは、美術については、光村図書出版を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「光村図書出版」が採択された。

【保健体育】

○吉野教育長

続いて、保健体育に移る。各委員の意見を伺う。

○大野委員

各者見開き2ページを1時間で学習できるよう構成されている。「課題把握」「調べたり考えたり話し合ったりする学習活動」「まとめ」「生活に生かす」といった学習の流れが分かりやすく示されていると思う。

大修館は各ページに記載されている資料が、詳細に説明されており、生徒が自ら理解を深められるところが良いと感じた。また、G a k k e nは章末に探究できるページを設け、学んだことをいかすことができる工夫がされている。

私は、生徒が主体的に学習に取り組みやすい、大修館かG a k k e nが良いのではないかと考える。

○守屋委員

探究できるという視点で考えると、大日本図書は、見開き2ページの左側に本文が掲載され、右側に資料が掲載されており、生徒が調べ学習や探究的な学習に取り組む際に、資料を活用しやすく他者とは違う特徴があると感じた。

○菅野委員

私は、東京書籍とG a k k e nで迷っている。

東京書籍は、各章の章末に、健康に関する資料が複数掲載されているが、特に思春期のやせについても取り上げている。無理な食事制限により、摂食障害になることもある中で、適正体重について丁寧に扱われている点が評価できると思った。

一方、ストレスの扱いについてはG a k k e nが良い。特に、ストレスを回復させようとする心身の力をゴムボールに例えて説明しているところが分かりやすいと思った。

○守屋委員

菅野委員からストレスの話題が出たが、その点では、大修館とG a k k e nが内容に多くのページを割いており、こうした記載をきっかけに子どもが自ら心の状態を振り返り、学習を深め、中学生という時期を健康に過ごすためにはどうしたら良いか、考えられるように工夫されていると思った。

○増井委員

職業柄、中学生には生活習慣病の予防や、喫煙・飲酒・薬物乱用の害などを、科学的にきちんと学習し、生涯に渡って健康に過ごしてほしいと考えている。掲載されている資料を見ると、G a k k e nは他者と比べて、喫煙や薬物依存などによる影響が豊富な資料とともにより具体的に示されており、生徒にとって分かりやすいと感じた。生活習慣病の予防や喫煙・飲酒・薬物乱用の害という学習を通して、生涯に渡って健康に過ごすための基礎的な知識や考え方をしっかりと身に付けられる点で、G a k k e nが良いと考える。

○守屋委員

確かに、G a k k e nは他者と比べて、たばこ・酒・薬物に誘われた時の実際の断り方などが詳細に記載されていると感じた。

どの教科書もそれぞれ良さがあるが、生徒にとって分かりやすく、実生活に結びついていくという点で考えるとG a k k e nが良いと思う。

○菅野委員

皆さんの意見を伺い、総合的に見るとG a k k e nが良いと思った。先程ストレスの話をしたが、G a k k e nでは、不安な時にどこに相談したら良いかを書き込める欄が設けられているところも良いと思った。

○吉野教育長

私も守屋委員、増井委員が言うように、子どもにとって身近な健康課題や、生涯に渡って健康に過ごすための学習や探究的な学習に対応している点で、G a k k e nが良いと考える。

ここまで意見は、G a k k e nを推す意見が多いようだがどうか。

○大野委員

大修館とG a k k e nで迷っていたが、皆さんの意見を伺い、私もG a k k e nが良いと思った。

○吉野教育長

それでは、保健体育についてはG a k k e nを採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「G a k k e n」が採択された。

【技術】

○吉野教育長

続いて、技術に移る。各委員の意見を伺う。

○守屋委員

技術科は、将来D I Yや家庭菜園ができる人を育てる教科ではなく、技術によって、社会の要請や人々の願いを解決できるような人を育てていく教科だと考える。

その点で、東京書籍の巻末に掲載されている「技術分野の学習を終えて」は、授業で学んだことをどのように生活や社会にいかしていくのかということをつかりやすく伝えていて良いと思った。

○菅野委員

将来へつながるという意味では、キャリア教育という視点で見ると、東京書籍では「技術の匠」、教育図書は「技ビト・スゴ技」、開隆堂は「インタビュー」で技術に関する職業観が育成できるように配慮されている。私はその中でも、東京書籍の「技術の匠」は、職業紹介だけでなく、その技術を社会にいかして還元していくかという点で述べられているところが良いと思う。生徒が自分自身のキャリアを考える上で、一つの材料になるのではないか。

○大野委員

私も東京書籍が良いと思った。理由は大きく3つある。

1点目は、巻頭のページに技術分野の学習方法が明確に示されていることである。技術の原理・法則や技術の仕組みを理解した上で、実習や実験などを通じた問題解決を行い、さらにそれらの学習を踏まえて技術を評価し、選択、管理・運用、改良、応用につなげていく。このような学習の流れは、今後生きて働く力につながると思った。

2点目は、「技術の見方・考え方」である。技術の最適化とは何かを漫画でわかりやすく明示しているところや、折り込みページの「最適化の窓」が優れていると思った。

3点目は、守屋委員も言っていた「技術分野の学習を終えて」のページである。これまでの学習で何が身に付いたかを振り返るとともに、学んだことをどう社会でいかしていく

かを考えることができるようになっていところが良いと思った。

○増井委員

私も東京書籍が良いと思う。東京書籍の問題解決型学習の扱いは丁寧で、どの編にも問題解決例とともに、自分のため、身近な誰かのため、社会のためと分かりやすく段階的に課題設定ができるようになっている。

開隆堂は漫画で「学習の流れ」が示され、教育図書は冒頭に、「立場や見方・考え方によって、解決策が異なる」という説明が示されているが、東京書籍の方がより具体的で実生活につながる内容になっており、優れていると感じた。

○吉野教育長

平塚市は農業が盛んであるため、「生物育成の技術」のページを見たが、東京書籍がスマート農業を詳しく扱っているところが特徴的だと思った。先日もある地区で最先端のコンバインなどを見せてもらった。人口が少なくなり農業の担い手も少なくなる中、技術による問題の解決を考えると、スマート農業は平塚の一つの方向性でもあるし、生徒に知ってもらえると良いと思う。

○守屋委員

農業にAIやICT、IoTを活用することは注目されている。他者も扱ってはいるが、東京書籍は分かりやすい。

○吉野教育長

技術については東京書籍を推す声が多いようだが、東京書籍を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「東京書籍」が採択された。

【家庭】

○吉野教育長

続いて、技術・家庭 家庭分野に移る。各委員の意見を伺う。

○大野委員

私は開隆堂の「多様な家族」が項目立てされているところに注目した。例えば「児童養護施設の指導員と子ども」や「国際結婚による親と子ども」など、他者と比べると家族の形が幅広く紹介されている。平塚にも多様な子どもがいるので、「自分に当てはまるものがない」と取り残されるような気持ちになる子どもが少なかったと思った。また、「家族は小さな社会」という視点で、性的役割分業やジェンダーについて触れられているところも良いと思った。

さらに、各者「幼児への接し方」を扱っているが、開隆堂は、触れ合いの場面で困って

いるイラストを示して、こんな時どうするかを自分で考えたりグループで話し合ったりする活動を掲載している。幼児と触れ合う体験を実施している中学校もあると思うので、より体験に役立つ準備ができるのではないかな。

○菅野委員

開隆堂のガイダンス「自立と共生で成り立っている生活」では、熊谷晋一郎さんの言葉で、自立というのは一人で何でもできるということではなく、「依存先を増やしていく」とと伝えていることが、今の自立を考える上で大事な視点だと思う。できれば熊谷さんの車椅子で生活している写真もあるとより良いと思った。また、ヤングケアラーのこともきちんと取り上げられていて、当事者のコメントも掲載されている。相談窓口や、具体的に困ったときの手続き、社会保障制度も紹介されていて、現代の実生活に結びついている。

○増井委員

私も開隆堂が良いと思う。開隆堂は家族・家庭生活のところでヤングケアラーや男女共同参画、「誰ひとり取り残さない」というSDGsの視点が掲載されており、「持続可能な家庭生活」を大切にしていることが伝わってくる。平塚市にも、様々な困難を抱えている子どもたちがいるので、できればそこをしっかりと取り上げている教科書の方が良いと思う。

○守屋委員

防災については、開隆堂が他者よりもたくさん取り上げている。地域における中学生の力は大きいと思うので、学校が避難所になった時に何ができるか考えることは大切だと思う。そういった点で、私も開隆堂が良いと思った。

○吉野教育長

食育という点で見ると、東京書籍が1日に必要な食品の種類と概量のページに、手で野菜を持っている写真を使用していて、他者より分量が分かりやすいと思う。また、調理実習で、例えばハンバーグを見ていただくと、東京書籍と開隆堂は調理工程が横に、教育図書は縦に示されているのだが、東京書籍はさらに下に、付け合わせのレシピも掲載している。実生活の調理では、同時に複数品作ることもあるので、それが時系列で視覚的に分かるのが大変気に入った。

○大野委員

調理の科学的な視点でいうと、開隆堂の「調理方法Q&A」というのが面白いと思った。私自身も初めて知ることがあり、中学生にとっても興味深いのではないかなと思う。なぜ沸騰してから食材を入れるのかや、生姜焼きに生姜を入れるのはなぜかなど、興味深い情報が掲載されている。

○菅野委員

調理実習でハンバーグを扱う学校も多いと聞いたが、開隆堂だけが煮込みハンバーグのレシピを扱っている。焼いてから煮込むという点で、加熱による安全性が考えられている

と思った。

○吉野教育長

安全性だが、「実習の安全」について、東京書籍が詳しく記載されている。開隆堂はイラストを見ながら考えようとなっているので、こちらは東京書籍の方が良いかと思う。

○守屋委員

教育図書の調理実習に、失敗例が掲載されているが、何を失敗と捉えるかは状況や立場によって違う。失敗から学んだり、失敗もあえて楽しんだり、そうやって試行錯誤することも大切かと思う。

○増井委員

皆さんの意見を伺うと、東京書籍か開隆堂になると思うが、大事なのは、何のために家庭科を学ぶのかだと思う。そう考えると家庭科では、「自立と共生」が大きなキーワードになると思う。開隆堂はその言葉の意味をしっかりと捉えていると思う。

○吉野教育長

東京書籍か開隆堂で迷うところであるが、菅野委員と増井委員が言ったとおり、開隆堂のガイダンスに記載されている「自立と共生は一体」は、やはりとても大事なところである。中学生のこれからの生活を考えた時に、自分で自分のことができる自立も大切であるし、「助けて」と言えることも大切で、そのことについて冒頭に記載されており、教科書全体にそういった思いが感じられる。そう考えると、家庭分野については、開隆堂が良いと思う。

それでは、技術・家庭科 家庭分野は開隆堂を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「開隆堂」が採択された。

【英語】

○吉野教育長

続いて、英語に移る。各委員の意見を伺う。

○増井委員

私は、開隆堂が良いと思う。開隆堂は各 P a r t の導入をマンガ形式で掲載しているという点が特徴的だと感じた。C o f f e e B r e a k というページでは、日本語と英語のマンガで使われるオノマトペの違いやSNSで使われる英語の略語表現などが取り上げられており、生徒の興味を引く内容だと思った。

○守屋委員

私は三省堂か光村図書出版が良いと思っている。現行の学習指導要領から、中学校で学習する語彙が増えたので、生徒が自分で辞書を引くということも一層大切になると思う。各者1年生の段階で辞書の使い方を紹介しているが、三省堂は英和辞典の紙面が大きく掲載されていて分かりやすく、実際の使用場面をイメージした演習が設定されている点が面白い。

光村図書出版は1年生の最初のページで、客観的なデータを根拠に、なぜ英語を学ぶのかということに触れているところが面白いと思った。また、単元の各Partで扱う文法項目が細かく分かれており、丁寧な解説がある点でも生徒への配慮を感じた。

○菅野委員

私は三省堂と光村図書出版が良いと思う。

三省堂は各単元のGoal Activityで、学んだ文法事項などを使って自分の考えや意見を表現する活動が設定されていて良いと思う。

光村図書出版は巻末に「英語の学び方ガイド」がついているところに魅力を感じた。また、各者CAN-DOリストを備えているが、項目の内容やレイアウトはだいぶ異なっているようである。光村図書出版は、領域別の到達目標をどの単元で達成するのかを明確に示していると思った。

○吉野教育長

私は三省堂が良いと思う。三省堂は、各単元の始めに身に付けるべき力を示している。何を学ぶかではなく、学んだことを使って何ができるようになるのかを生徒目線の言葉で示しているところに魅力を感じる。各Partの始めにはSmall Talkが設けてあり、少しずつ話す力を伸ばしていく設計になっている。

○大野委員

私も三省堂が良いと思う。三省堂は今回の改訂で英語を練習するというより、活用する場面が増えたという印象である。これは小学校の外国語で大事にしている、自分の思いを伝えるために英語を使うという理念と一致していると思う。各PartのScene1でまず「聞くこと」から入るという設定からも言語習得の流れを大切にしていると感じた。

○増井委員

皆さんの話を伺い、英語を使うことを通して力を付けさせるという意味では三省堂が優れているという印象を受けた。

○守屋委員

私も三省堂が良いと思う。

○菅野委員

三省堂の新たな強みが分かった。私も三省堂が良いと思う。

○吉野教育長

それでは、英語は三省堂を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「三省堂」が採択された。

【道徳】

○吉野教育長

続いて、道徳に移る。各委員の意見を伺う。

○菅野委員

道徳が教科化された背景には、いじめ問題への対応が関わっている。各者、いじめ問題への対応については工夫が見られるが、特に力を入れていると感じられたのが日本文教出版である。いじめユニットの配置回数が他者と比べて多く、配置時期も工夫されている。人間関係が不安定になりやすい長期休み明けにも配置しているのは日本文教出版だけである。生徒にとっても教師にとっても、その時期にいじめ防止を意識することは、大切なことだと思う。

○吉野教育長

いじめ防止という観点で考えると、一昨年の12月に改訂版が出された「生徒指導提要」では、いじめの構造の中で、傍観者に焦点を当てたいじめ防止の取組が重要であると示されている。菅野委員が言った日本文教出版では、いじめの構造について大変分かりやすく図式化されている。また、東京書籍、教育出版、あかつき教育図書でも、いじめの構造について図式化されているが、分かりやすさでは日本文教出版が一步前に出ている印象である。

一方、光村図書出版は、いじめの構造について図式化されてはいないが、日常場面を描いた漫画を通じて、それぞれの立場や思いに触れている。中学生にとっては、いじめをより自分事として捉え、深く考えられるという点で、光村図書出版も良いのではないかなと思う。

○増井委員

道徳科では、「考え、議論する道徳」が重要視されているが、G a k k e nの「メモ」欄と、東京書籍の「つぶやき」欄は、自分の考えをもちやすくするための工夫であると思った。また、自分の思考を視覚化することができる東京書籍の心情円と、話合いのヒントとなるキーワードがカード化されている日本教科書のウェルビーイングカードは、生徒同士の議論をより活発にするためのツールの一つとなると思った。

それぞれ工夫はあるが、私はその中でも、光村図書出版の「まなびの道具箱」が魅力的だと思った。自分の考えを整理したり、話合いを活性化したりするのに役立つと思う。

○大野委員

生徒が考えを深め、議論を充実させるためには、「問い」も重要になると考える。「問い」について特化していると感じるのは光村図書出版である。発問例が豊富で、質が高いと思う。各教材末にあるように「考えよう」の発問以外に、視野を広げる「見方を変えて」、他教科や日常生活とリンクさせる「つなげよう」の発問が用意されている。また、光村図書出版が一貫して大切にしている学習過程「自分に問う」「友達と問いつく」「生き方を問う」は、道徳科で求められている、自己を見つめ、他者と対話し協働しながら、道徳的価値を多面的・多角的に考察することにつながるものである。

○守屋委員

自己を見つめるときに、自分自身の変容や成長を実感しやすい「振り返りの工夫」も大切であると考え。日本教科書以外は、振り返り用のシートがあったり、最終教材として振り返り教材が配置されていたりする。基本的には、学期や年間ごとの振り返りなのだが、光村図書出版と日本文教出版の2者だけは、授業ごとの振り返りも書く欄が設定されている。授業ごとに書き溜めてきた振り返りを見返して、自分自身の変容や成長を実感することができるのは、大変良い手立てだと思う。さらに光村図書出版は、振り返りだけでなく、一年間の始めに学びたいことや伸ばしたいことを書く欄もあるので、自分自身の変容や成長がより感じられるのではないかと。

○吉野教育長

ここまでの意見をまとめると、光村図書出版と日本文教出版に絞られてきたと思う。両者の大きな違いとして、別冊があるかないかということになるが、いかがか。

○大野委員

別冊については以前よりも自由度は上がっているが、それでも決められた枠内に考えを書くことになるため、別冊は必要ないと思う。

○守屋委員

枠だけなら、ノートでも良いのではないかと。

○菅野委員

皆さんの意見を伺い、総合的に考えると光村図書出版が良いと思う。

○吉野教育長

それでは、道徳については、光村図書出版を採択してよいか。

【結果】

全員異議なく「光村図書出版」が採択された。

2 議案第17号 令和7年度平塚市立小学校使用教科用図書の採択について

【提案説明】

○吉野教育長

令和7年度に平塚市立小学校の生徒が使用する教科用図書について採択するものである。
詳細は、教育指導課長から説明する。

○教育指導課長

令和7年度平塚市立小学校使用教科用図書の採択については、「義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律」第14条において、「政令で定める期間、毎年度、種目ごとに同一の教科書を採択するものとする」とある。平塚市立小学校使用教科用図書は、令和5年度に採択され、令和6年度から9年度までの4年間、種目ごとに同一の教科書を採択することになっている。よって、資料を確認の上、採択していただくよう願います。

【質疑】

な し

【結果】

全員異議なく原案どおり可決された。

3 議案第18号 令和7年度平塚市立小・中学校特別支援学級使用教科用図書の採択について

【提案説明】

○吉野教育長

令和7年度に平塚市立小・中学校特別支援学級の生徒が使用する教科用図書について採択するものである。

詳細は、教育指導課長から説明する。

○教育指導課長

令和7年度平塚市立小・中学校特別支援学級使用教科用図書については、学校教育法附則第9条により、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学大臣が著作の名義を有する教科用図書以外の図書を使用することができる。

資料にある「特別支援学校用（小・中学部）教科書目録（令和7年度使用）」、「令和7年度用一般図書一覧」、本市で採択された教科書及び下学年の使用教科書、拡大教科書（弱視者用含む）からの選定となるので、確認いただき採択をお願いする。

【質疑】

な し

【結果】

全員異議なく原案どおり可決された。

【閉会宣言】

○吉野教育長

以上で全ての案件の審議が終了したので、教育委員会 7 月定例会は閉会する。

(15 時 48 分閉会)